

教育委員会会議録

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議

開 会 日	令和6年（2024年）7月18日（木）	
開 会 時 間	午前9時00分 ～ 12時00分	
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室	
出 席 者	委員会	遠藤洋路 教育長 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 澤栄美 委員 村田 慎 委員
	事務局	須佐美徹 教育次長 福田衣都子 学校教育部長 他
協 議	令和7年度（2025年度）使用中学校教科用図書の採択について （美術・家庭・地理・）	
署 名	西山 忠男	
	澤 栄美	
会議録作成者	教育センター 村上公英	

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議【7月18日（木）】

〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長	令和6年第6回臨時教育委員会会議を開会いたします。
〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長	本日は、私のほか4人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。 会議規則第14条 第2項の規定に基づき、会議録署名人の指名を行います。会議録署名人は、西山委員と小屋松委員とします。
日程第1 協議	
・協議1 令和7年（2025年度）使用中学校教科用図書採択について（美術・家庭・地理）	
遠藤洋路 教育長	それでは、協議1 令和7年度（2025年度）使用中学校教科用図書の採択について事務局より説明をお願いします。
榎木敏之 副所長	協議1について説明します。令和7年度から中学校で使用する教科書全16種目の採択をお願いします。本日は、そのうちの「美術」「家庭」「地理」3種目についてご協議をお願いします。 まずは、熊本市教科用図書選定委員長から報告をさせていただきます。
伊藤友子 選定委員長	まず、「美術」の教科書の調査結果について、研究員記録員が説明いたします。
	《山本清 研究記録員説明》
伊藤友子 選定委員長	次に教科書展示会の意見集約の結果報告を事務局が説明いたします。
	《榎木敏之 副所長 説明》
伊藤友子 選定委員長	ただいまの報告について、事前に選定委員会にて調査報告を審議した結果、内容は妥当であると判断しました。
西山忠男 委員	まず、第一に、何のために美術を学ぶのか、学校教育で美術を教える目的は何かということが明確に分かる教科書でなければならないと、私は思うん

澤栄美 委員

です。それについて、文教出版は、美術の活動は、あなたがこれから社会に働きかけ、世界へとつながっていく力を育む大切な学びですと、明確に書いてあります。開隆堂のほうは、見方や考え方を広げ、社会に役立つ価値を生み出し、未来をつくりましょと書いてあります。ところが、光村は、扉を開けると、美しいという、谷川俊太郎の文章が出てくるんです。どっちの教科書だろう。美しいしかないんです。芸術の目的というのはいろいろあるはずなのに、美しいだけを強調して、いわゆる優美心といいますか、耽美心といいますか、そういった視点でつくられているように思われてなりません。ピカソのゲルニカ、美しいか。ゲルニカで訴えたかったことは、美しさではないはずですよ。そういういろんな芸術の目的があるのに、それを誤解させてしまう、それが光村にはあると思うんです。光村は非常によくできたすばらしい教科書だと思いますけれども、その基本的なところが、私は、大きな問題を感じました。開隆堂と日文は、私はどちらもいいと思いますけれども、最後の表紙の芸術性のところで開隆堂に分があるかなという印象を持っています。

美術をなぜ学ぶかというところの話になると思うんです。表紙とは、ちょっと私の話は関係ないんですけども、熊本の子供たちの実態として、そういう芸術とかにあまり触れていないという実態がある中では、そうじゃなくても、やっぱり美術に触れるというのは、将来にわたって生活のクオリティーを高めることにつながるんじゃないかなと思うんです。みんなが作家になるわけではなく、美術的なことをやっていくわけでもないの、そういう意味では、鑑賞というのがすごく大事なかなと思ったときに、評価の関係で、対話的な学びというのがあって、表現の意図を話すのが難しいという実態も上がっている中で、対話的な学びができる教科書というところで、ゲルニカと風神雷神のところあたりは、やっぱり光村は、子供たちの対話を促している、最初から答えがあって、こう考えられたらいいんじゃないのかというのではなく、そういうふうな取扱いをしてあるのは、特に評価としては私はいいかなと思いました。

その一方で、やはり美術はどうしても制作というところになっていくと思うんですけども、私は、美術は割と好きなほうだったんですけども、やっぱり例えば色を塗ってしまうと、あれ、デッサンのときはえらいいい感じでできていたのにみたいなのが結構あったんです。それは、やはり技術を知らない部分があったんです。それからすると、各ほかの教科書にも、技術に関するところは各単元であったと思うんですけども、こういった資料がついていて、こんなふうにやればいいんだというのを具体的に見られるというのは非常にいいんだという点では、私は、光村図書がいいかなというふうに思っています。

最後に、質問ですけども、タブレットの活用のところで、熊本市の調査

林田敬二郎 研究員 代表	の観点としてICTを活用するということもあって、タブレットの活用について作品制作にも活用するということがあったんですが、アプリを活用した作品制作、これはどのようなアプリを使って、そしてどの単元でこういったことをされるのかというのを教えていただきたいと思います。 タブレットの美術科での活用というのは、他教科に比べると多いというのは、先ほどのデータで出ておりましたけれども、私どもも実感しております。鑑賞ではよく使うんですけども、制作においても、例えば校内で風景画を描きましょうといったときに、校内をずっと子供たちが散策しながら写真を撮っていきます、タブレットを使って。その中で、一番自分にとって魅力的だった構図というのを、実際この画用紙に描くときにそれを利用して描いたりとかというふうなことに活用したり、写真という題材で制作をするときもございますし、それから、アニメーションをつくらうというときに、動画を撮ったり、あるいは写真をこま撮りにして撮ったり、こうやってアニメーションをつくっていくということでも活用します。 あと、実際、紙とか画用紙とかに絵の具でつけていくときに、自分が思うように描けなかった、塗ってしまってから失敗に気づいて、またやり直ししなければとかいうふうなのを、子供たちもとても嫌がりますので、事前に鉛筆で描いた下絵に、タブレットで写真を撮って、タブレットを使って、そこで配色計画、色を、こういう色をつけたいなというふうなのを、実際タブレットの中でやってみて、あ、これがいいというふうに自分で判断して、ポスターカラーで塗り始める、そういうふうな活用をしたりとかというふうなことで、タブレットを利用していくということです。
澤栄美 委員	そういった意味で、どこの教科書が、そういうのに適しているとかいうのは、あまりなく、先生方の発想でそういうふうに取り組まれているということでよろしいでしょうか。
林田敬二郎 研究員 代表	どの教科書も、写真とかアニメーションは使っております。タブレットを使って、制作をしていくような。それ以外の風景画とかそういったことに関しては、学校現場の職員の中でのアイデアで、そういうふうな取組が出てきたものと思っております。
澤栄美 委員	ありがとうございました。もともと美術が好きだったというのもあって、とてもどの教科書も工夫してあって、子供たちが美術を学ぶのに、すごくわくわくする内容かなというふうに思いました。ありがとうございます。
小屋松徹彦 委員	私が話したいと思ったことを、澤委員が全部言ってしまったので、今日は完璧にかぶってしまったなと思いましたが、先ほどの対話的な学びの

	ところのご説明がありましたとおり、本当に、結論をそこに書かずに、やっぱり別の頁にしてあるということは非常に大事なことで、それが徹底してされていたのが光村図書かなというふうに思っていて、非常にその点はよかったなと私は思っています。 それで、もう一点、あとは別冊、光村の別冊の、資料の説明があったときに、3年間使うのでなくしてしまうかもしれない、そういうご心配がありましたけれども、そこはどうやって克服したらいいんだろう。忘れないにこしたことはないんでしょうけれども、そこら辺ちょっと聞いてみたいということと、それから、もう一つ、やっぱりデジタルコンテンツがどういうふうに使われているかなというのが、非常に私も興味があったのですが、今、林田研究員のほうからご説明があったので、大体分かりました。 以上です。
林田敬二郎 研究員 代表	学びを支える資料みたいな言い方で、光村の資料もそうですし、各社とも、教科書の後半のほうに、そういうコーナーを設けて、生徒たちがそこをちょっと参考にしながら、自分の表現活動に生かしていくというふうなものは、3社ともあります。光村の場合、今回、別冊にしてありまして、研究員の中でも、これはもうなくしちゃったりすると困るので、一回学校に持ってきたらずっと学校に置かせたいですよというふうな、3年間ですね、そういうふうな話題になったところでした。また、光村の2、3年生の、また後半のところにも、学習を支える資料一覧というのがございまして、それ、また項目というか、内容ごとに、二次元コードが掲載してありまして、それから中身を入れていくと、タブレットの中で、また、いろいろな学びを支える資料、技法あたりに対して確認できるような、そういう工夫がされておりました。 以上です。
小屋松徹彦 委員	確かに別冊でも詳しく資料として説明されている上に、なおかつ教科書の中にもそういうものが盛り込まれて、動画もあるということで、非常に、充実度とかそういうのも感じましたけれども、であれば、教科書をつくる段階で、別冊じゃなくて一つの折り込んだ方が、つくり方としてはいいんじゃないかなと思いましたが、いかがでしょうか。
林田敬二郎 研究員 代表	それも一つの方法だと私も考えますけれども、入れれば入れるほど教科書が厚くなり、重くなりというふうなことも一応考えながら、こういうふうな各社の工夫があるんじゃないかなというふうに思っております。
小屋松徹彦 委員	確かに重くなる、厚くなるのは、困るでしょうけれども、動画というのが今後どんどん活用されると思うので、そちらのほうを充実させていって、教科書の厚さは変えないという、そういう方向性もあるかなというふうに思い

村田 模 委員	ます。 以上です。 皆さん、おっしゃっていたのを私も同感だったんですけど、光村図書の、子供たちに考えさせて対話できるように持っていくような工夫がうまいなと感じました。 日本文教出版は、実際に生徒の作品というのがたくさん載っていて、いろんなアイデアを参考に子供たちもひらめいて、作品に挑戦してみることにつながっていくんじゃないかなというふうに思いました。 あと、どの教科書も、最後のほうに美術館へ行こうというページがあるんですけども、そこ、開隆堂がとてもかわいらしいイラストで紹介されていて、とても入りやすいなというふうに感じました。 美術館って、行くのに勇気が要る子もいると思うので、大人ですら、マナーってどうだったっけとか、どういうふうに回ったらいいのかなとか、自分の回り方って何かおかしいかなとか、気になったりすることがあるんですけども、そういう美術館の基本的なマナーとか、鑑賞のポイントというのが書いてあって、自分たちもちょっと行ってみようかなというふうに思いやすいかなというふうに感じました。 やっぱり、一番最後にご説明いただいたんですけども、表紙のインパクトがとても大きく、すごく細かいんですけども、教科書の後ろの、表紙の後ろの資料提供登録のお名前のところ、氏名とか一覧が、その表紙の作品の形になっていて、そういう細かいところまで、1年生だったら、ドラゴンの口の形になっていて、ゴッホのひまわりだったら、ヒマワリを入れるつぼの形になっている細かいところまで面白くつくってあるなというふうに思ったところでした。以上です。
遠藤洋路 教育長	ほかにかがでしよう。よろしいですか。 私からのコメントですけども、表紙は開隆堂がすごくいいなと思いましたし、実際この教科書展示会の、子供たちの意見も、開隆堂の表紙に集中しているという、子供たちの心を動かしていたという感じなので、非常にこの時点で話題というか、いいんじゃないかなというふうに思います。 ただ、表紙だけで3年間もつのかなというふうに、割とすぐ飽きるかもしれないなというふうに思っていて、中身は、やっぱり光村がいいなというのが正直な思いです。さっきのゲルニカなんか全然ほかとは違います。光村は、最初に白黒の写真からいって、広げてもゲルニカだけ、大きく描いてあって余計なことが描いてない、次の頁もゲルニカなんですよね。それで、ゲルニカを見る少年という写真があることで、この作品の大きさも分かるし、単にゲルニカ一枚を載せていますというだけではないところも、全然ほかのところとは違うなというふうに思いました。

	あと、開隆堂だと、ゲルニカの頁前はモナリザですし、次はロダンですし、何か全部全く関係ないもの、全く関係ないとは言わないけれども、有名な作品が並んでいるのは確かなんですけれども、文脈がありません。そういう意味で、やっぱり光村の見せ方というのは非常に優れているなと思います。 それと、西山委員と澤委員がおっしゃった、最初の、何のために美術があるのかという、これもどうなんでしょうね。美術って、そんなに前向きなもの、行儀のいいものでもないと思って、何か社会のためとか、未来のためというのも一元的というか、美術の一つの側面なんでしょうけれども、美しいというのも一つの側面なのかもしれないけれども、まあやりたいからやっているというのが一番のモチベーションなんじゃないのかなという。そういう意味では、開隆堂の1年生の開いたところにある「なんでもいいから、まずやってみる。それだけなんだよ。」という岡本太郎の言葉が一番そうなのかなという気がします。 ただ、義務教育で税金を使って美術を学ぶということであれば、ある程度前向きな目的があるのは間違いない、それは、我々としてはそうなんですが、それとどういうふうに子供が接するかというのは、また別の話なのかなというふうに思います。豊かな人生とよりよい社会のために美術があるというなら、ゴッホなんかどうなんだよみたいなことになるわけで、多分、そこはいろいろなかなというふうには思いました。 日本文教出版も、表紙が一番、美術という枠がないという言い方はおかしいけれども、開隆堂と光村は、美術1とか美術2というところ、地の絵が区別されている。日本文教出版は全体が絵になっている、そういう意味では、表紙は見晴らしがいいですね。日本文教出版が一番作品の感触を味わうにはいいのかなというふうに思った、そういうよさもあるかなと思いました。 なので、それぞれいいところはありますけれども、まあこの表紙が、やっぱりインパクトが大ですかね。これはきっと、卒業してからも、美術の表紙あんなだったなと思って覚えているレベルのものじゃないのかなと思いますよね。なので、これは、結構大きな部分かなと思いました。 ほかにご発言はありますか。よろしいですか。 では、ほかになければ、美術は以上といたします。
伊藤友子 選定委員長	まず、「技術・家庭科（家庭分野）」の教科書の調査結果について、研究員記録員が説明いたします。
	《廣瀬文子 研究記録員説明》
伊藤友子 選定委員長	次に教科書展示会の意見集約の結果報告を事務局が説明いたします。

《樫木敏之 副所長 説明》

伊藤友子 選定委員長

ただいまの報告について、事前に選定委員会にて調査報告を審議した結果、内容は妥当であると判断しました。

西山忠男 委員

3つの教科書、どれもいいところがあると思いました。

東京書籍は、やはり最初にご説明のあった家庭分野のガイダンスのところで、自分の生活チェックとか、自分で記入する欄が結構あって、自ら振り返ることができる、あの工夫が非常にいいなというふうに思ったところです。

教育図書は、何といても、86頁から89頁にかけての食品の成分表、これがすばらしくて、私は、これは一生使えるものだと思うんです。中学校の学習だけでなく、これだけのものは、なかなか手に入れようと思っても簡単に手に入らないので、この教科書は一生大切に使えば、私も欲しいぐらいなそんな感じで、これ一つとっても、私は本当は教育図書を採用したいなと思うくらいなんですけれど。

開隆堂は、73頁に子供の健やかな成長のためにという発展項目があって、その次の頁は、子ども権利条約が、子供を守る法律とか、子供オンブズパーソン制度を利用するとか、ほかの教科書にはあまり載っていないですよ。これが特徴があつていいなというのと、それから、持続可能な社会に向けてという、284頁からのこの記事が、ほかの教科書よりは充実しているというふうに感じたところでした。

全体的に見ると、確かに東書はすばらしいですけども、私は、ちょっと教育としては疑念を持っていますので、あの表についてどう思われるか、ちょっとご意見を伺いたいんですけれど。

栗田佳代 研究員代表

ありがとうございました。おっしゃるとおり、ガイダンスから全体の紙面構成も含めて振り返るという一連の家庭科で身につけたい力が身につくような工夫が、非常に東書はあるなと思っております。

それから、おっしゃったように、教育図書のこの資料集に、資料集にたがわれないような食の頁の充実ぶりはさすがだなと、前回からそうだったかなと思っています。

それから、開隆堂に関しては、家庭生活、家族といったところに非常に重点を置かれて教科書づくりがなされております。おっしゃるとおりだなと思っています。

全体の紙面構成あたり、子供に身につく力あたりを考えたときに、東書のほうは非常に全体的にいいのかなというような印象を持っています。ありがとうございました。

澤栄美 委員	まず、東書が、説明にあったように、一つ一つ自己評価、特に16頁、17頁で振り返ってチェックするというのが、いわゆる学習するという意味ではすごくいいのかなというふうに思った一方で、家庭というものを学ぶ意味として考えたときに、将来的に自分が、食生活にしても住生活にしてもそうですけれども、よりよい生活を送っていくためのものだとは思いますが、そういう力を一人一人がつけていくというのが大事だと思うんですけれども、一番、この間の学習会の時にも思ったところなんですけど、例えば、東書で言うと、33頁に、孤食、共食というのがあるんです。 それから、開隆堂にはちょっと見つけることができなかったんですけども、あるのかもしれませんが、教育図書でも、共食とコ食も、孤独の孤と個別の個のそれが上げてあるんですが、東書の中の文章の中に、個々の生活が多忙になったりすることなどにより、一緒に食事を取る機会が少なくながちですが、できるだけ共食を心がけましょうとあるんです。やむを得ずコ食になっている子供の存在というのをどう考えているのかなというのを、かなりやっぱり一般的な家庭をモデルとして書かれているというところが、非常に気になったんです。 開隆堂には、孤食、共食があるのかどうかちょっと見つけ出すことはできなかったんですけども、これはもう絶対にそれを扱わなければいけないのか、扱うとすればどういうか扱い方をするのかというのは、ぜひ考えていただきたいというのが、一つでした。 そういう視点で見えていくと、さっき西山委員もおっしゃった開隆堂の73頁から75頁、こども基本法もできて、こういったものが取り上げられているということは、非常に評価に値するなというのを思っていて、25頁の発展でも、家族、家庭を支える形態ということで、自分たちが福祉の中でどう守られているかということを取り上げられているということ、それから、開隆堂のほうも同じく31頁のヤングケアラーを取り上げているというところは、いろんな子供を対象とする学校教育という中で、非常に、ここは私は評価したいところだなというふうに思いました。 そしたら、孤食について取り上げ方とか、そこも含めてどういうふうに、そこがその評価の観点に入っていたかどうか分かりませんが、個人的な考えになるのかもしれませんが、聞かせていただきたいと思います。
栗田佳代 研究員代表	失礼いたします。澤委員がおっしゃったように、非常に家族と家庭生活というのは、私たちもいろんなところに配慮しながら授業の中で扱う内容です。特に、この授業をする前には、担任のほうに家庭背景だったり配慮すべき点なんかを聞いてから授業に臨むようにしております。

	また、本当に、おっしゃられたようにいろんな家庭があつて、いろんな悩みを抱えながら生活している子供たちが目の前におりますので、そういったところもかなり配慮して、授業では行っております。 教科書だけではなくて、やはり補足もしながら、本当に自分の今生きている家族があなたの家族だからというようなことも伝えたりしながら、子供たちに生きる誇りを持たせながら授業を終わるような形を取っています。 おっしゃられたコ食に関しては、扱わなければならないというわけではありません。ですが、今の社会背景とか状況上、扱ったり、そして、それに関して補足もしながら授業は行っているというような形になっています。よろしいでしょうか。
澤栄美 委員	分かりました。本当に共食がいいということは、十分分かっていて、そのあたりの配慮というものがやっぱりされているということがよく分かりました。ありがとうございました。
西山忠男 委員	今の問題ですけれども、澤委員が気にされたのは、独りで食べざるを得ない子供に対する配慮が、この記述は足りないという意味だと思うんです。それに対しては、この教育図書の73頁をご覧いただきたいんですけれども、ここには、こども食堂でつながろうという記事があつて、これは非常に澤委員の懸念を払しょくするようないい記事になると、私は思っています。
村田慎 委員	私は、住まいの中で起こる事故についてのところを比較をさせていただいたんですけれども、教育図書のそのところが物すごく丁寧に書いてあつて、どこの部屋でどんな危ないものがあるかというのが、二次元コード、入ると、気になるところを押してみようという、自分たちで答え合わせできるような形にはなっているようなんですけれども、ただ、教科書に細かく丁寧にびっしり載っているので、どこにどういう危険があるかなというのを、子供たちで話し合ったりというふうにするとしたら、ちょっと答えを教えてあげ過ぎなのかなというのは、ちょっと気になりました。 開隆堂の食寝分離、就寝分離についてというのが、ほかのところと比べると少し丁寧に書いてあつて、家族間にもきちんとプライバシーというのがあるんだという説明がとても丁寧だなというふうに感じました。感想です。
小屋松徹彦 委員	私も一番インパクトがあつたのは、教育図書の、職員が一斉に評価、非常に分かりやすくいいなと思っておりました。 あとはもう皆さんがおっしゃったことでダブっているのもありますので、省略しますけれども、今までだと東書を使っていたということで、今回の教科書の中で、東書の改善点というか、特に変わっているなという部分があったら教えてください。二次元コードの使い方も含めて。

栗田佳代 研究員代表	失礼します。特に改善されているのは、このレッツスタートという、課題設定に至るまでの、ここは非常にやはり子供たちも、それから教員も非常に苦労しているところです。ここが、本当に導入なんですけれども、このところで、子供たちが自分の生活と重ねながら全体を見つめたり、発見したりして、ここができれば、1時間の授業、それから実生活に役立てるというか、使えるというか、そういうところに結びついていくと思うんです。このレッツスタートから課題設定に至るところが非常に今回工夫されているなと、前回以上に工夫がなされているなと思ったところが一つです。 それから、ICTです。前回も非常によく工夫されていたと思うんですけれども、今回、さらに献立を作成すると、1日分の献立を作成するという、子供にとっては非常に難しい内容があるんですけれども、そこに関しても、非常に秀逸なICTがつくられておりました。 また、シミュレーションというのが充実してまして、例えば、衣服のコーディネートをしよとかいうときも、自分の写真を、自分を撮って、それを顔のところに当てはめて、そして模様を動かしたり、模様の幅を細くしたり太くしたり、色を重ねたりと、そういったところが非常によく工夫されている。 それから、思考ツールあたりも、本市は、ロイロノートを活用していますので、そこともリンクして使えるなというところが、非常によかった点ではないかなと思っています。以上です。
遠藤洋路 教育長	よろしいですか。 私からちょっと質問なんですけど、教育図書と開隆堂は、表紙を開けたらいきなり目次なんです。表紙の裏側も目次なんですけど、東京書籍は、糸みたいなのがあって、大体ほかの教科だとの教科書も、非常に前書きというか能書きというか、ああだこうだいつてから目次になったりするじゃないですか。何で家庭だけ、もういきなり目次なんだろうなと思って。疲れちゃったのかもしれない。何か理由があるんでしょうか。
栗田佳代 研究員代表	私たちの中で、研究員の中で話題に出たところは、教育長がおっしゃるように、確かに目次があるのと、目次がない、スタートとして目次がないものとあるなという話にはなったんです。 この東京書籍のこのスタートのところは、学習を始めようと、家庭分野の学習を始めようというところでスタートして、これが一本の糸というか、未来につながる糸がずっと最後の頁まで、最後近の裏表紙といいますか、そういったところまでずっとつながっておりまして、そして、ドアを抜けて、3年後の自分、未来の自分に行くといったストーリー性を大事にしているのかなと、いろいろな話をしたところでした。

遠藤洋路 教育長	分かりました。最近のというか、ほかの教科の、今回、教科書を見ていると、大体そういうふうになっているものが多くて、東京書籍はそれをほかの教科と同じようにつくっているんだなと思いました。 あと、教育図書と開隆堂は、その点、非常に資料集というのかな、最初から最後まで、先ほどおっしゃった言葉で言うと、ストーリーとかいうのがあまりなくて、ひたすら何か資料を詰め込んでいるみたいな感じが、確かに何となくするなというふうには思ったので、その点、東京書籍のほうが何か整理されているように、私には思えました。 それと、開隆堂の、先ほどの説明の中にあつた、付箋の6番の177ページですか、スーパーと道の駅の比較みたいなものがあるんですけど、これはどうなのかなと思って。スーパーのほうが見た目はよかったと書いてあつて、道の駅のほうは見た目はよくなかった、でもおいしかったと書いてあつて、スーパーのは味はコメントしないのかなという、非常にフェアじゃないなと。見た目はよかったなだったら、見た目はよくなかったよで終わりじゃないですか。見た目はよかった味もおいしかったというふうな、見た目はよくなかったでもおいしかった。何かこれだと、スーパーより道の駅のほうがいいですよみたいな誘導的な感じ、ステレオタイプというんですかね、そういう感じがして。上のキュウリを見ても、実際、この写真の中に並んでいるのも全然違うじゃないですか。どっちも一緒ですよ、スーパーも道の駅も。何かちょっと…。やや、フェイクとまでは言わないけど、どうなんだこれというふうな、何か他のコメントも、何かいちいち押しつけがましいというか、説教臭いというか、私もどうも違和感があるコメント、吹き出しのコメントが多くて、なじめなかったなというのが率直な印象です。 他にご意見、ご質問よろしいですか。 では、他になれば、技術家庭の家庭分野は以上といたします。
伊藤友子 選定委員長	まず、「地理」の教科書の調査結果について、研究員記録員が説明いたします。
《中島沙知 研究記録員説明》	
伊藤友子 選定委員長	次に教科書展示会の意見集約の結果報告を事務局が説明いたします。
《榎本敏之 副所長 説明》	
伊藤友子 選定委員長	ただいまの報告について、事前に選定委員会にて調査報告を審議した結果、内容は妥当であると判断しました。

西山忠男 委員

最初に説明があったオセアニアにおけるアボリジニの共生の話なんですけれども、これは教科書によってかなり記述が違います。特に、アボリジニに対する記述が、東京書籍ですと、137頁にありますけれども、白豪主義からの転換というのが前頁から書いてあって、多文化社会を目指してという記述なんです。そこでは、近年では、アボリジニの人々に対する政策も見直されており、先住民としての権利が尊重され、先祖が住んでいた土地の所有権も認められましたという、これだけの記述になっているんです。アボリジニの人々を迫害してきたということは一言も書いていないんです。

次の教育出版、これは一番よく書けていると思うんですが、121頁、移民は、オーストラリアで採集や狩猟をしながら暮らしてきた先住民アボリジニの人々の土地を、所有者のいない土地として奪い、牧畜業に利用したため、アボリジニの人口は激減してしまいました。その後、アボリジニを白人に同化させる政策が行われてきましたが、現在では、アボリジニの文化を保護し、土地に対する権利を認めるようになっていきますというふうに、詳しく迫害の歴史と同化政策、その見直しということが書いてございます。

帝国書院は、123頁です。123頁に簡単に書いてあって、アボリジニを中心とする先住民の人々も多文化社会の大切な一員として、彼らの社会的、経済的、健康上や、独自の伝統文化を尊重するための努力が続けられています。これだけしか書いてなくて、白豪主義についても記載がない。迫害についても記載がないと思います。この点、ちょっと帝国書院は片手落ちという気がします。

次、日本文教出版は、125頁で、ここに、アボリジニはかつては狩猟と採集を中心とする生活を送っていました。しかし、移住してきた人による迫害や抑圧、病気の流行によって人口は大きく減少しました。生き残った人々も、多くは土地を奪われ、自立した生活を続けられなくなりました。このような過去の出来事を反省して、現在、オーストラリアではアボリジニとの共生を進めていますというふうに、詳しく書いてあります。ということで、日本文教出版と教育出版の記述が多文化共生においては非常に優れているとの判断をしました。

それと、さらに、日本との関わりがきちんと書いてあるのが教育出版なんです。これも、教育出版、123頁を見てください。日本とオセアニアとの関わりということで、第二次世界大戦では日本がアメリカ合衆国やオーストラリアなどと太平洋を戦場として戦い、オセアニアの住民と環境に大きな被害をもたらしましたというようなことがきちんと書いてあります。教育出版だけです、こういうことが書いてあるのは、太平洋の島国と日本のつながりというコラムが右側にあって、日本とのつながりがよく書いてあるということで、このテーマについては、私は教育出版を一番高く評価します。それと、もう一つ教育出版のいいところは、全然関係ない話になるんですけれど

	も、真ん中の130頁辺りに、こういう見開きで、きれいな日本列島のこの航空写真が出ているんです。これ、地理の教科書ですから、こういうきれいな全面図が出ているということは非常にすばらしいことで、ほかの教科書にない特徴だと思いました。そういうわけで、ちょっと教育出版は◎が少ないんですけれども、私は一番評価しました。
小屋松徹彦 委員	私は、まとめのところの部分で、ちょっと見させていただいたんですけど、それでいくと、6でしたかね、あるいは5の部分ですけど、まとめを見たときにすべてに二次元コードがついているんですけど、この二次元コードの内容が少し各社によって違っているなという部分がありまして、例えば、もう少し深める意味での問題が載っている部分とか、説明がそれぞれによって違うと思うんですけど、すみませんが、そこを少し説明いただけますか。この二次元コードとのまとめの兼ね合いです。
小崎洋之 研究員代表	では、失礼します。確かに4社とも多種多様、たくさんの二次元コードを用意されています。その中で特徴的なことを、まずご説明いたします。 まず、東京書籍です。東京書籍は、まず、二次元コードが必要な頁の定位置、もう決まった定位置に必ずあると。不特定な位置じゃなくて、決まった頁の決まったところにあるというので、子どもたちがまず位置を確認しやすいという特徴があります。そして、その二次元コードを開けば、教科書の頁が振ってあります。この教科書の頁に必要な二次元コードをつないでいけば、もうリンク先はここだというふうに整理されています。ですので、子どもが学習をするタイミングで必要なものが、より少なく選択することができるというようなメリットがあり、これが、補充的なものから外部リンクの発展的なもの、バランスよく配置されております。 それと、教育出版なんですが、これは、学びリンクといって、編や章の頭の頁に示してあります。教育出版の場合は、このリンクがほぼほぼ外部リンクが中心になっております。ですので、どちらかという、補充的な内容よりも、発展的で、学んでいく子どもたちが、さらに詳しくもっと学びたい、もっと詳しく知りたい、もっと詳しく追究したいという発展的な内容の外部リンクがとても多い。ただ、この補充的なものというのが、ほぼほぼ教育出版にはありませんので、どちらかという、もう応用というような内容が多いです。 次に帝国書院です。帝国書院は、デジタルコンテンツに1750、トータルでつながるようになっております。非常に豊富です。帝国書院の場合は、まず、アニメーションを使って、地球というこの球体のものを、どうしても教科書、地図帳あたりは平面で扱います。なかなかイメージしにくい、その平面のものを、アニメーションを使い立体的に表して、例えば地球の自転であるとか、時差のことであるとか、こういった地球を宇宙から眺めるイメー

	ジで捉えやすい、そういうアニメーションを多数配置しておられます。あと、いろんな外部リンクやNHK for schoolとつながって、非常に豊富であるということです。 日本文教出版です。これは、節のまとめ、単元のまとめというんですが、そこに二次元コードが配置され、そこを開いていくと、ポートフォリオ、例えば、これはノート代わりと思っていただければいいと思います。まとめる学習シートであったりポートフォリオであったりとか、そういうところに書き込んでいけば、ノートをきっちり自分でつくっていかなくても、そこでコンパクトに学びのサポートができるという、どちらかというと学習を支えるような内容のものが多いです。以上です。
小屋松徹彦 委員	ありがとうございました。その中で、特にまとめの学習を振り返ろうというところについている二次元コード見てみると、帝国書院と、それから日本文教出版、ここは結構、少し深める部分の記事があったと思うんですけど、東京書籍とそれから教育出版、ここはもう単に今のこの教科書に載っている部分のシートそのままなので、そういった面では、前者の2つがよかったのかなと思ったところでした。ありがとうございました。
澤栄美 委員	学校の意見と子供の意見で、日本文教出版、資料、教員のほうは資料が少ないで、生徒のほうからは資料が多いと書いてあって、どんな感じなのかなと思っていたときに、今の小屋松委員の質問の中で、コンテンツ数が、東京書籍と日本文教出版の中身が違うということで、これからの時代は、資料はデジタルでかなりカバーできるのかなというのちょっと考えたりもしたんですけども、今のところで質問になるんですが、ポートフォリオが日文はあるということで、例えば、説明の視点5であった、今言われるまとめと振り返りのところとの関係性というのは、ポートフォリオでまとめるのと、こっちとの関係性というのはどうなっているのかなというのが、一つ質問です。 それと、もう一つは、私は、地理の教科書なので、やっぱり今、特にコロナ後に地球市民という感覚が大きくなったという、世界中がつながっているというところで、その流れのその前から、もうSDGsのことも言われてきていたんですけども、東京書籍以外は、一番最初の頁にSDGsについての説明があるんです。これってすごく重要な気がするんですけども、東京書籍は、食べ物のことがあって、それで、58頁にSDGsって何なのというのが出ているんです。この、やっぱり一番最初にSDGsということで、特に環境については項目としてかなり多いですよ。例えば、東京書籍の58頁の部分、ちょっと書いてあるので言うと、例えば6とか、それから13、14、15とか、そのあたり、かなり地理に関係あるようなことが多いのか

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議【7月18日（木）】

なと思ったときに、一番最初にSDGsについて入っていたほうがいいのか、それとも、東京書籍のような扱いでもいいのか、2点お願いします。

小崎洋之 研究員代表	では、まず1点目の日本文教出版のまとめ、これは、オセアニアでいうと129頁ですかね、128、129のポートフォリオのところ。ここはもうほぼほぼ一緒です。これは、タブレットの中書き込めるというような、ノート代わりになるという捉えで理解いただければと思います。ノートでもできるんですけども、自分でノートに書き込むこともできるんですが、もう様式があるものの中書きしていく、それを蓄積していくという捉えでいいかと思います。 それと、2点目の質問です。確かに今ご指摘がありましたように、東京書籍以外は、巻頭の最初のところに、SDGsというものが打ち出しており、東書というのは、その後のほうに出てきます。その理由は、学習指導要領の中の社会の改訂の趣旨のところに、まず、持続可能な社会を実現する、その担い手としての資質能力を育むと。まず、最初に改訂の趣旨が出てきます。それが持続可能な社会ということなんです。そこからSDGsというのは来ているんですが、一番、そのSDGsという課題から地球的な課題というのを、学習指導要領で、それぞれの州ごとに立てなくちゃいけないんです。それは、SDGsの17のゴールから地球的課題を、州に合ったものをまず選ぶ。それは学習指導要領に出ております。その中から、今度は、その州に応じた単元を貫く課題というものを設定するようになって、その課題について追及、そして構想していく学習が、ちょうど世界の諸地域になっております。それで、最初にSDGsというのを持ってきて、実際に意識して、特にSDGsというのを意識しながら学習する単元が世界の諸地域ということで、間が大分空きます。その間に、空いたところは、やはり日本や世界の地域構成とって、地理的なことが多いんです。だから、あまり使う、意識するという単元ではなく、主に使うのがその世界の諸地域ということですので、その直近にSDGsという視点を打ち出しております。 ほか、日本文教出版も巻頭で扱い、世界の諸地域の前でもう一度触れてきました。先ほどもちょっと申しましたように、東京書籍は、持続可能な社会に向けてと、ちょっと表現は変わるんですが、そういうコンセプトで巻頭に出ております。 以上です。
澤栄美 委員	今、お話になった、州と言われたんですか。
小崎洋之 研究員代表	州ですか。州は、アジア州やオセアニア州……。
澤栄美 委員	その州。はい、分かりました。よくお話分かったんですが、今、私は、東京書籍と日文、どっちがいいかなと思って聞いていたので、お尋ねすると、そういう意味で言うと、東京書籍がここでSDGsを持ってきたというのとは分かるなと思って、そして、その上で、日文のところ、日文って、世界の諸

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議【7月18日（木）】

小崎洋之 研究員代表	地域のところでさらにまた扱っていますというご説明だったので、ほかの2社は、世界の諸地域のところではもう改めて扱っていないんですか。 ほかの2社は、世界の諸地域のここで考えさせたいという頁に、SDGsのマークが、頁の一番右の上のところに示されている、そういう頁もあります。
澤栄美 委員	先生の個人的な意見になるかと思うんですけども、東京書籍での扱いのように、ここで初めて出すのが指導する上でいいのか、それとも、日文のように最初にSDGsについて学んで、そしてまた改めて、先生でしたらどちらを推奨されますか。
小崎洋之 研究員代表	あくまでも個人的な見ですが、ちょうどこれ、1年生が4月に学校に入学してすぐ開き、学び始めるんです。1年生の4月、SDGsのことを話をするんですが、なかなかそれが、やはりずっと定着しているわけではないのが現状です。世界の諸地域にいくまでにかなり時間がかかりますので、その世界の諸地域にいくまでに、もう一回やっぱりどうしてもSDGsという視点を押さえ、地球的な課題についてしっかり学んでいくんだという動機づけというか、意識づけをもう一回そこで押さえなければ、視点がぼやけてしまう。ですので、私は、東書の直近でしっかりもう一回押さえるというのが、どちらかというと、私は授業をするならばそっちがやりやすいかなと思います。
西山忠男 委員	SDGsの教育も難しくなったと思うんです。最初に国連が出したときは非常にいいことが始まって、人類に希望が見えたと思ったんですけども、その後、ウクライナ戦争が始まって、ガザで紛争が起こって、国連のグループがあらわになりましたよね。あれ、どうするんだ、SDGsなんてもうむなしい標語になってしまった。それが現実だと思うんですけども。だから、あまりSDGsを強調した教育というのが何かむなしいような気がして。例えば帝国書院だと、最初に、ウクライナの逃れてきた子供たち対象に異なる授業というのが、ちょっと出てはいますけれども、こういう問題を抜きにして、やっぱりSDGsは語れない。ちょっと何かSDGsの観点から教科書を選ぶというのは、あんまりどうかと私は思います。
小屋松徹彦 委員	今の西山委員の意見に対して、私は、SDGsを掲げておかないと、あちこちですごいことが起こっていますけれども、そこを起こらないようにするためにも掲げておかないということは感じておりますので、その観点から捉えてはほしいと思ったんです。 それから、全然別の観点になりますけど、対話的な学びのところで、東京書籍は◎で他は○となっておりますけど、日本文教出版も結構対話的な学び

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議【7月18日（木）】

小崎洋之 研究員代表	としては触れているんじゃないかなというふうに思ったんですけど、やっぱり◎と○の差というのはどこかにあるんでしょうか。
小屋松徹彦 委員	小屋松委員、すみません、東書が、◎の理由ということですか。 それと日文との比較です。日文は○、東書は◎になっているので、なぜ日文は○なんだろう、◎でいいんじゃないかと思ったんです。
小崎洋之 研究員代表	対話的な学びというところの、東書と日文の差というところなんです、この対話的な学びというところと、観点の1、2、3というのは連動しています。主体的で対話的で深い学びで、どれもリンクしているというところで、ちょっとご説明をいたします。 まず、東書なんです、東書の南アメリカ州の学習をまとめようの127頁を見ていただくと、当然、ここで単元を貫く課題に対して追及して、そして答えを考察するという場面なんです、この（2）のところは。それをみんなで持ち寄って、まず、グループで対話をして、そしてグループから今度は個人に移り、個人でまた構想を練り直して、そして、さらにまたグループで発信するという対話の流れの中で、先ほど熊本市の市学調の結果の課題であった、いろいろな様々な立場から考察をしたり、様々な視点から考察をするというところで、対話の場面が必要になるのかなと考えました。 東書の場合は、対話をする、この対話のポイントとして、様々な立場、視点というのが示してあります。127頁のその例で言いますと、（2）です。農牧業開発からの視点、観光開発からの視点でどう思うか、あるいは工業開発の視点からどう思うか、あるいは、人々の生活に伴う開発の視点からどう捉えるかという視点を示した上での対話というふうになっております。もう一つ言うならば、今度は、これも同じです、89頁。これは、ヨーロッパ州の学習をまとめようというところで、ここも、（3）番のところなんです、まず、経済面からという視点で考える、生活面の視点で考える、環境面というふうに、視点というのを明確にして、視点から対話に結びつけるように構成がなっております。ですので、対話をする際にも、多面的、多角的な対話の活動が、東書の場合はできるように構成されています。逆に、これは、日本文教出版も、これは東書と非常に似ているんですが、毎回毎回視点というのが実は示されているわけではないんです。ですので、もちろん、非常に似ているんです、甲乙つけ難く似ているんですが、会話をする際の視点、様々な立場から考え、それを対話につなげるというのが若干不足しているというところが、この◎と○との差になったところです。
小屋松徹彦 委員	ありがとうございます。よく分かりました。今、実際見てみたら、やっぱりそういう感じなので、分かりました。

遠藤洋路 教育長

ほかにかがででしょうか。よろしいですか。

私からコメントですけれども、まず、東書に関してなんですけれども、私は、いいところもあるかもしれないけれども、ちょっと弊害が多過ぎるというふうに思います。

まず、東書の特徴として、各地域を各頁にキャッチフレーズ的に、何か各地域を大ざっぱにまとめたようなキャッチフレーズついているんですけれども、オセアニアだったら、乾いた大地と大きな島々、132頁の一番最初。次が、オーギービーフも人気、で、様々な文化の共存で、何か非常にステレオタイプというか、そんな一言でまとめられないというふうに思います。じゃ、九州は何て書いてあるのかなと思ったら、185頁、「南北に長い地域」です。「それ？」ということなんです。だから、ちょっと言うことに困ってこれしかないのかなというふうに思うんですけれども、じゃ、それぞれの地域のよさを、本当に特徴をどのぐらい示しているかというふうに思います。

世界の各地域を見ると、例えば、アジアは62頁で、自然も文化も色とりどり、ヨーロッパは80頁で、たくさんの言語や文化、北アメリカは106頁で、世界の人と文化が集まる、南アメリカは120頁、世界の人々と文化が交わる、もう結局同じになっちゃうんです。

だから、各地域の特徴を一言でまとめようとするこの試みは失敗しているというふうに思いますし、同じことを繰り返すか、非常に偏ったステレオタイプを植え付けるかどちらかしかできていない。

一方で、教育出版も、何かそれぞれちょっとそういうまとめたようなキャッチフレーズ的なものもあるんですけれども、帝国書院と日本文教出版は、それぞれのところで、例えばアメリカ合衆国の人々の生活でどのような特色と課題があるんだろうとか、問いかけになっています。九州地方は、地形等にどのような特色が見られる地域なんだろうとか。それは、東京書籍から言うとな南北に長い地域ですということになるんでしょうけれども、それだけなのかという。やっぱり問いかけで始まっているほうが、妙な先入観とかステレオタイプを植え付けるよりも望ましいというふうに、私は思います。

それから、これはたまたまなのかもしれませんが、オセアニアの先ほどの頁、付箋で言うと、付箋3のところは、オーストラリアはチャイナタウンが出ていますけれども、その前のオセアニアの、付箋3の130頁、これがチャイナタウンで、138頁付箋2のところも、これもシドニーのチャイナタウンで、さらに、SDGsのところに出ているオーストラリアもチャイナタウンなんです、59頁ですね。何か東書の教科書を見ると、もうオーストラリアというのはチャイナタウン、中国圏の国になったというふうな写真しか出てこない。しかというか、それがもう一番最初に全部出てくる。なので、非常にそれはそれでどうなのかというふうに思う。アジアとの関わりというのもそうなんだろうけれども、何となくオセアニアというのはアジ

西山忠男 委員	アの属州みたいな、そういうふうに見えてしまうようなイメージに、私からは見える。アジアの人がどんどん住んでいて、だんだんアジア化している地域ですよというふうに見えてしまうので、何となく東京書籍の各地域の取り上げ方はやっぱり偏りがあると。偏っていないところはマンネリというふうに見えてしまって、非常に内容的に私は弊害が大きいというふうに思いました。 教育出版は、東京書籍よりはましだと思いますけれども、それでも、何か各地域の特徴というのが、そうですね、それだけなのかなという。九州でいうと、例えば、教育出版だと74頁、九州は多様な自然が見られる地域、次は、火山とともに暮らす、その次は、特色ある自然と多様な農業、次は工業に続いて、あと環境と続く。何か九州というのは自然しかない。最後の工業出てきますけれども、どうしても何か特色、キャッチフレーズ的に上げようと思うと、かなり偏った取り上げ方になってしまっていると思うので、私は、東京書籍は今回はちょっと選ぶのはどうかなというふうに思いましたし、教育出版もちょっとその点は同じかなというふうに思いますので、個人的に帝国書院か文教出版のほうが好感が持てるなというふうに思ったところです。 さらに、東京書籍に恨みがあるわけじゃないんですけれども、さらに言えば、先ほどの章のまとめのところが、オセアニアでもそうだし南アメリカでもそうなんですけれども、例えば127頁で、探究課題を解決しよう、南アメリカ州はこれこれこうという特色のある地域ですというこの中を、5行ぐらいで、小さい枠を埋めるような形なんですけれども、結局、南アメリカってどういうところなのかと一言でまとめろというのが、最後の課題、それが探究課題ですよ。だから、東京書籍はやっぱり各地域はもう一言ステレオタイプのキャッチフレーズで見ているという、そういう視点でつくられた教科書というふうに見ざるを得ない。 それぞれの地域で多様な見方がやっぱりあると。南アメリカ州を一言で表すんじゃなくて、それは、自然であったり、言語であったり、文化であったり、経済であったり、様々な面で様々な特色があると思って、それを一言で言い表そうという、そういう姿勢の教科書というのは、地理の教科書としてはどうなのかなというふうに、私は思っています。ですので、そういう先入観やステレオタイプの偏見がない教科書のほうがいいのかなと思ったところです。 現在、帝国書院を使っているんですよね。それで、先ほどの二次元コードの説明も、非常に帝国書院の評価が高かったと思うんですけれども、この表だと、帝国書院は◎が4つしかないんです。一番評価が低くなっているんですけれども、これはどういう……。現在使っていて、やはり帝国書院があまりよくなかったという評価なのか、新しい教科書でやっぱりこういう評価に
----------------	--

小崎洋之 研究員代表	なってしまったか、それと、ちょっとよく分からないんですが、二次元コードがあれだけ褒められたのに、こんなに表になっている、そこはちょっと教えていただけますか。 では、今のちょっとご指摘、帝国書院の◎が少ないというところからご説明申し上げたいと思います。ただ、西山委員、ほかの教科書会社とちょっと比較しながらの説明になりますが、よろしいですか。 まず、私たちが一番に調査の主眼を置いたところが、一番最初の入り、熊本市の市学調の劣っている点、マイナス点、これが、いろいろな立場や視点から見えるようにしているというのが低いんです。それともう一つ、進んで調べたり学んだり解決しようとしている主体的な意欲の面も、これも落ちているんです。これが、2年生も、これも基本同じで、点数は取れるんだけど、やっぱり多面的に見る、調べたりする力、あるいは主体的に調べたりしようという意欲がやっぱり落ち込んでいる。ここがやっぱり一番の課題ではないかという視点で、ほかの調査員たちとやってきました。 じゃ、なぜ、主体的なところというのが弱いのか。特に、帝国さんには○になった、東書は◎になったというところで比較いたしますと、まず、主体性というところで、例えば、オセアニアの導入の頁をちょっと見ていただければと思います。すみません、130頁、131頁です。
西山忠男 委員	東京書籍ですね。
小崎洋之 研究員代表	東京書籍です。まず東京書籍が、これちょっと◎になっているところなんですけれども、まず、この世界の諸地域というのが、SDGsの17のゴールから地球的な課題というのを示さなければならない、これは学習指導要領に書いてあります。この中から選ぶようにと。そこから主題を教科書会社ごとにつくり、これが単元をつなぐ課題といいます。これが、ほかの地域とのつながりというところで東書は打ち出していたんですが、まず、見てもらおうと、単元を貫く問いというのが、まず導入のところに出てこないんです、このつくりは。写真です。見ると、これはオセアニア、オーストラリアなのに、これ、中国とか、台湾、これ何かちょっと雰囲気が違うぞと、子供たちはそこでつぶやくんです。疑問が出ます。そして、よくよく見ると、あれ、これ白人がいる、これ観光客じゃないか。ところが、よくよく見るとこの人たちはスケボーを持っている。ということは、チャイナタウンの近くに住む白人の住民じゃないかと、またここでつぶやきが出ます。131頁にいくと、これ、ラグビーのワールドカップで見たことあるな、この緑は、実はこれは何か意味があるなと、これをよく見ると、白人もいるし、アジア系の人かな、あるいはちょっと違うなという疑問やつぶやきというのがいっぱい出てきて、そして、ここで何を学ぶんだろうという期待感というか、わくわく感というか、

	興味が喚起されるんです、このつくりは。そこで、何を学ぶというところまでまずいかず、興味が物すごく湧き立てられます。そして、次の頁、132頁、133頁、このわくわく感を少しずつ統括していきます。それが、オセアニアの自然環境というところから、オセアニアというのは地理的にこういうところだよと、気候であったりとか、地形であったり。そして、そこに住む人たちの生活や文化というところに少しずつフォーカスをしながら、そして、このオセアニアで学ぶ単元を貫く問いというのが探究課題として出てきます。ですので、興味を喚起した状態の中で、この探究課題という意味づけ、こういうのが、単元を貫く問いを提示するためのちょっと一工夫があるということです。 それで、今度、帝国さんを見てみますと、帝国さんのところになんですが、118と119に鮮やかに大きな写真があります。この写真の中で、一番右下にこのオセアニア州で学ぶ単元を貫く問いは、他地域との関係性ですと、もう教科書自体にぼんと、もうここから出てきます。ですので、教科書が示す単元を貫く問いというのが、もう生徒の中に、これでいきますというような状態で、生徒はここで知るということになってきます。 逆に、もう一パターン、教育出版で言いますと、教育出版のオセアニアのところを見ていただくと、これもちょっとつくりが少し帝国さんと似ていて、116、117、これは、オセアニア州という見開きの右横に、この単元を貫くこの章の課題というのは、学習テーマとしてこれですと、見開いた瞬間、テーマがぼんと出てくるんです。そして、その意味づけというのを、解説で文章として書いてあります。だから、教科書次第で単元を貫く課題がどんと出てくるか、生徒の興味関心を引き立てながら意味づけをしながら、わくわく感を高めながら、あ、だからこれを学んでいくかというので出てくるか、ここの一つの主体性というところで差がついたというところであります。以上です。
遠藤洋路 教育長	西山委員、よろしいですか。今で言うと、オセアニアの一番導入のところは、東京書籍も、右下に、オセアニア州で学んでいくことと書いてありますけれども、これと、ほかの教科書の右下に書いてあるものと何が違うんでしょうか。
小崎洋之 研究員代表	基本、これは、学習指導要領の中で地球的課題というのが、これはもう決まっています。だから、地球的課題に沿った単元を貫く問いというものを設定してありますので、どの教科書会社も、ほぼほぼこの単元を貫く問いという中身は同じような内容になっています。
遠藤洋路 教育長	私が今言ったのは、東京書籍と教育出版と帝国書院を比べて、東京書籍が生徒にわくわく感がという話がありましたが、教育出版と帝国書院は、右下

	にもうやることが書いてあるというふうにおっしゃったんですが、東京書籍も右下にオセアニア州で学んでいくことというのが書いてあるわけで、今見た3社とも、右下に、オセアニア州で学んでいくこと、オセアニア州で学習する地球的課題、オセアニア州の学習を見通そうと、右下に全て書いてあるので、そんなに違わないんじゃないですかということを申し上げたんですけれども、そんなに違いますか。
小崎洋之 研究員代表	東書の場合は、オセアニア州で学んでいくことという、この項目というかコーナーをつくっているのは、これから学んでいく見通しを立てるための表と捉えてもらっていいと思うんです。ただ、ここで探究課題を立てようと思いますが、具体的にどんな探究課題かというのは、ここではまだ出てきません。その次の頁で、自然環境を眺め、生活文化を包括しながら、そこから初めて探究課題というものに提示がなされているというところが違ってきます。
遠藤洋路 教育長	ここでやることがこういうことですよというのが書いてある点では、変わっていないように思うんですけれども、違いがあるとすれば、東京書籍は3つ書いてある。ほかのところは1つという、その違いはあるかもしれませんが、性質としてはそんなに変わらないんじゃないかなという印象なんですけれども、そうでもないですか。
小崎洋之 研究員代表	いきなりぼんと出すか、少し興味を引き立てながら子供たちに眺めさせながら出すかという、その違いに最後はなるかと思います。
遠藤洋路 教育長	いや、東京書籍も、テーマは書いてあるわけですね。人々による他地域との結びつき、多文化社会を目指してとか、貿易や経済による他地域との結びつき、農産物や鉱産物の輸出と観光業と。それがこういうふうに出てきているわけで、それが、ほかの教科書、先ほど紹介した2社は、多民族の共存の問題であったり、他地域との関係を主題にどのような特色を持つ地域なのか学習していこうということであって、それと、質的に違うかなというところが、ちょっと分からないんですけれども。 今言ったのは、東京書籍で言うと138頁です。
小崎洋之 研究員代表	すみません、もう一回お願いしていいですか。
遠藤洋路 教育長	東京書籍の131頁の下に、オセアニア州で学んでいくことという緑の部分があります。その中に、1番は、オセアニア州を眺めてですけれども、2番が、貿易や経済による他地域との結びつき、農産物や鉱産物の輸出と観光、3番が、人々による他地域との結びつきとして、ここで学ぶことがこれです

	よということはここに書いてあるんですよね。それは、帝国書院や教育出版で、ここに、オセアニア州で学習する地域課題、多民族の共存の問題と書いてあったり、オセアニア州の学習を見通そうで、他地域との関係性を主題に、オセアニア州がどのような特色を持つ地域なのか学習をしていこうと書いてある。これと質的にそんなに違うんですかということを申し上げている。
小崎洋之 研究員代表	これは、毎時間学習する学習課題ということで、例えば単元の1、これが132頁になります。このオセアニア州を眺めてという単元を学習して、そして、2番目、貿易や経済による他地域との結びつきというのを、その次の頁で学習をして、そして最後に、人々による他地域との結びつきを通してという、その毎時間の学習課題というものに迫りながら、これを一つ一つ学習していくと、探究課題につながっていくというこの見通しの説明になっています。ほかの教科書で書いてあるのは、あくまでもこれは単元を貫く問いというのが書いてありますので、少しそこは異なります。
遠藤洋路 教育長	問いが最初に書いてあるのと、もうやる中身が書いてあるので、やる中身が書いてあるほうがわくわく感が高まるという、その根拠は何ですか。
小崎洋之 研究員代表	その根拠は、熊本市の教育センターから推奨されている授業づくりの3つのポイントというものが、私たちには絶えず言われております。めあてと対話と振り返り、この3つをしっかりと意識していきましょうと。よく私たちが指導を受けるのは、毎時間のめあてなんです。このめあてを、以前は、板磁石の長いやつにばばっと教師側の狙いとして書いて、今日の授業の皆さんが履修することがこれですと、いきなりバンと黒板に貼って、そこから授業が始まる。こういう授業というのは、子供の興味を全く引かない。教師主導型になったり、あくまでも教師発信型の授業になりますので、前回の振り返りをしながら、対話を通しながら、疑問や、えっというトピックを引き出しながら、じゃ、ここから勉強するのというのは、こんなふうに考えてみない。じゃ、こういうふうに、みんなの疑問の中からこんな狙いでいきましょうねと言って出すようにと、対話の中から引き出す、興味やつぶやく疑問の中から引き出すということを私たちは推奨されるように、学校訪問等で指導を受けております。その手法と非常に似ているというのが、この東書の単元を貫く問いの出し方と合致していると分析したところです。
遠藤洋路 教育長	分かりました。東書の右下の部分に何も書いていないのなら、ほかの教科書との違いは明確かなというふうに思いますけれども、結構具体的にいろいろ書いてあるので、そんなに何か違うのかなというふうに今思っ。一つじゃなくて、幾つか書いてあって、最終的に探究課題を立てようという呼びかけになっているというところの違いは分かりますけれども、中身がもう見え

西山忠男 委員	ているよねという意味では、東書もそうなんじゃないかなというふうに思ったところです。おっしゃっていることは分かりました。ありがとうございます。西山委員。 オセアニアでいろいろ議論になったんですけども、結局、この東書の130頁で、チャイナタウンをばんと持ってきているというところ、ここに意外性がある、生徒にこれで「あれっ」と思わせる、そこから問いが始まるというのを狙っているという意味なんです。普通オセアニアというと、やっぱりこの帝国書院のこういう写真、このイメージが強いから、逆に、チャイナタウンを出すことで、意外性を投げかけていることなんだろうと思いました。それは分かりました。でも、それが正しいやり方かなというのは、ちょっと、本当にオーストラリアに行ったことがない生徒、全くイメージのない生徒に、もうチャイナタウンの写真をばんと出すと、教育長が言われたような誤解を与えるというのもちょっと懸念されるのかなというふうには思います。
遠藤洋路 教育長	オセアニアとかオーストラリアのイメージがあって、それと違うものを見たら、こういうふうになるんだろうというふうに……。大人が持つ、中学生がこれを学ぶ段階でどのぐらいオセアニアに対する、あるいはオーストラリアに対する、みんな固定的なイメージを持っているか、それがそうですね、西山委員がおっしゃるように、オペラハウスがあって、白人の国という固定観念があったところに、「へえ、こんなんあるんだ」というなら分かりますけれども。 中学生は実際どうなの、どのぐらいオセアニアやオーストラリアのことを知った上で、予備知識を持った上で、ここに入っているんでしょうか。
小崎洋之 研究員代表	ちょっとこの図の中で説明をさせてもらいたいと思います。今、教育長がおっしゃったことが黒い三角のところ。子供たちは、自分たちの経験値の中からオセアニアに対する知識であるとか解釈というのは、少なからず、個々によって違うんですけども、持っています。これが黒いところです。恐らく、私が昔、授業したとき、授業の前にアンケートを取って、オセアニアのイメージというのは何と聞いたとき、一番多く出てきたのが、コアラです。コアラがいる。次に出てきたのが、ラグビーのちょうどワールドカップがあっていましたので、白人がたくさんシーンの中にいたと。そして、今度はメジャーリーグ、大リーグの中にも、野球のワールドカップでもオセアニア選抜のチームがいて、アメリカでプレーしている白人が、故郷オーストラリアに戻ってプレーしている。だから、白人の国家じゃないかという捉えはとて多かったです。オーストラリア、イコール白人だと。ところが、ワールドカップのラグビーが始まったとき、ハカを踊るんです。これって何なの

	という疑問がとても強くて、とても興味関心がある子は自分たちで調べていました。これはニュージーランドの先住のマオリの人たちの儀式的な行事なんだと。これが、ラグビーの試合の前に、みんなで気持ちを高めるための、鼓舞するためのパフォーマンスなんだと。だからこれは、先住の人たちのこの伝統がつながっているんだというのも、古い知識の中にありました。 あと最後、もう一つが、ウルルです。以前、エアーズロックとかいったんですけれども、これは「世界の中心で愛を叫ぶ」という映画に出てきたので、子供たちはこれよく知っています。そういうイメージの中で、レディネスとか予備知識というものを基に授業をやります。先ほど出てきた、よく出てくるこの中華街なんですけど、この黒い、これまでの経験値の中の知識や解釈が、この写真を見ると、拡大していくんです。あれ、オーストラリアは白人国家なのに、あれ、チャイナタウンがあるよ。アジア系の人たちがいるんだというふうに、この黒い三角が、少し黄色みがかかったものに拡張していきます。知識が拡張したり、解釈が拡大していったり、そういう授業構成になっています。それを東書さんはちょっと意図して、意外性というものであえてここに持ってきてあるのかなと。 学習指導要領の中でも、建国の歴史と白豪主義は必ず押さえないと書いてあります。これは歴史よりも地理が早く始まるからです。その中で、移民の国、白豪主義、ただ、これが労働問題でオーストラリアの国策として立ち行かなくなった。だから、白豪主義をやめて移民を受け入れようとなった。ところが、ヨーロッパとのつながりの中で、非常に貿易の資源を輸出するコストがかかりますので、アジアとつながったほうが輸送コストが非常にかかって、国策としてよかった。だから、アジアとつながりを持ち、貿易を持った。その中で、教科書のこの136頁になります。ここに、移民の割合の変化、アジアとの結びつきが強くなったということを、学習指導要領の中で押さえないと示してあります。 ですので、あえてアジアに注目をさせて、移民の割合がこのように変わっていったというのを示してある、そういう流れで構成が作ってあると理解しております。
遠藤洋路 教育長	先ほど黒い部分の話なんですけれども、ラグビーとか映画とかによる知識というのは人によって相当違うと思うんですけども、小学校段階ではどんな学習をしているんですか。あるいは、特に学習していないという前提なんでしょうか。
小崎洋之 研究員代表	教育長、すみません。私、勉強不足で小学校の経験がちょっとございませぬので、聞いた話の中でお答えしてよろしいですか。非常にアバウトになりますが。

遠藤教育長	それか、小学校の先生が言いましょうか。答えてもらっても。いや、小学校段階で特にオセアニアや、その中の国々について何も学習していない状態なんであれば、ラグビーで知っているからとか、テレビで見たからというのが、この黒い部分だとして、それってどこまでその前提にしてよいのかなというふうに思います。 先ほどのオセアニアの紹介、ここに出てくるのは、主な写真が3つともチャイナタウンの写真なので、むしろその前提となっている、これまでのところがない人にとっては、もうここから入るから、こういうところなんだというふうに思うんじゃないのかなというふうに、私は考えますけれども。どうぞ。
平川純哉 指導主事	失礼いたします。社会科担当の平川です。小学校での世界の学習や記載に関する学習に関して、簡単に補足いたします。 小学校では、世界の学習は5年生と6年生で少しずつ話をします。5年生では、大まかに世界地図を見ながら、いろんな国があるということ、その中で、国旗であったり、大まかなことを学習します。6年生の3学期で、また国際社会の学習をする中では、主な国を4つ程度を拾い出しています。それを調べて、その文化であるとか習慣であるとか、宗教との関連とか、そういったことを学習します。 この4つをどれにするかというのは、各授業者の裁量によるところですけれども、教科書で扱われている国としては、アメリカ、中国、韓国、ブラジル、サウジアラビア、そのあたりが多いようです。 現在、熊本市の子供たちが使っている東京書籍、これから使う教育出版、その中の4つの中に、オーストラリアは入っておりません。以上、補足しておきます。
遠藤洋路 教育長	分かりました。ありがとうございました。大人目線で見れば、この黒いところが十分分かるので、このチャイナタウンの写真に意外性を感じる、そういう狙いはよく分かりますけれども、そもそもこの黒いところがないとか、ほとんどない状態で、オーストラリアというのはチャイナタウンなんですよという写真を3回連続で見せられたら、何かそちらがこの黒いところになるんじゃないですかというように思ったので、そんなに何か意外性をここに感じるほどの、みんな、前提、予備知識を持っているのかなというところは少し気にはなります。
西山忠男 委員	私も全く同感なので、私は3回、オーストラリアに行きました、パースとメルボルンとケアンズ。そのときの印象はやっぱりこっちのイメージですよ。どうしても近代的な白人国家というイメージが強くて、街で見かけるホームレスの人は、ほとんどアボリジニだったんです。だから、アボリジニの

	人たちが社会階級的に非常に低い位置にあるというのは非常に感じていたんですけれども、だから、先ほどアボリジニのことを一生懸命話をしたのです。仮にオーストラリアの人がこの教科書のこの紹介を見たら、ちょっとショックを受けるんじゃないですかね。自分の国はこんなチャイナタウンだらけじゃないと言うに違いない。例えば、日本の紹介をするときに、長崎の中華街と横浜中華街の写真を出して、長崎は中国との結びつきが強いんですよというような紹介のされ方をして、東京の写真が出てこなかったら、やっぱり日本人としてはそれちょっと片手落ちだよねと思うと思うんです。それと同じことがこの教科書で行われているような気がして、私も、教育長と全く同じ意見なんです。
村田 慎 委員	そういうわけではなかったんですけれども。ただ、確かに私も、ちょっとそこで注目を引けるかと言われたら、そこまでじゃないのかな。でも、先ほど、ラグビーと映画の話が出てきましたけれども、これから小学校から中学校に上がっていく子供たちとかはあまり知らないんですよ。ラグビーのそのときのことほどはあまり知らないだろうし、映画のことも知らない人が多いのかなと思うので、それで、えっというふうに、この写真ではとどけるかといったら、それはちょっとと思いますし、今、西山委員の話も聞いていて、確かに現在の方がこれを見たときに衝撃だろうというのを聞いたときに、自分もこの教科書、先ほど教育長がご指摘されましたけれども、九州がどういうふうに紹介されているのかなと思って見たときに、南北に長い地方ですというのを見たときの衝撃と同じようなものを感じるんじゃないかなというふうに感じました。自分は、説明を聞いている中では、学習を振り返って、考えをまとめて、発表したり、生徒さん同士で議論したりという対話の工夫というのも、日本文教出版はとても丁寧にやられているんだなというふうに感じたので、そこまではっきりと◎と○の区別というのが、自分もちょっとつかなかったんで、それはちょっと悩んでいたところではありました。さっきご説明いただいて、納得したところではあるんですが、ただ、じゃ、どちらにするか、どこにするかと言われたときには、ちょっとやっぱり悩んでしまうというのが正直なところなんです。
小屋松徹彦 委員	最初に中華街が載ってまして、多文化共生というのはこのオセアニア州での大きなテーマなので、これもありかなというふうに私は思っていました。あまりこれといってショックを受けることはありません。
遠藤洋路 教育長	ありがとうございます。よろしいでしょうか。 では、ほかにご発言がなければ、社会の「地理的分野」は以上といたします。

令和6年（2024年）第6回臨時教育委員会会議【7月18日（木）】

〔閉会〕 遠藤洋路 教育長	以上で、本日の会議日程は全て終了いたしました。他に何かご発言はございませんか。 他にないようでしたら、これで、令和6年第6回臨時教育委員会会議を閉会いたします。
-----------------------------	--